
ONE PIECE 最強の転生者

横山 龍也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 最強の転生者

【Nコード】

N0864Z

【作者名】

横山 龍也

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった主人公は、三つの漫画の力を授かりONE PIECEの世界に転生させられてしまった。とりあえず主人公がすることは・・・？

プロローグ

「初めまして」

俺は誰かに声をかけられた。

ここはどこなんだろう．．．もしかして夢？

辺りは真っ暗で何も見えない。

そう思った瞬間、俺の前に光とともにやってきた女性。

「初めまして、私は全ての世界を統括する神です」

はあ？

なんか突然やってきた女が変なことを言い出したぞ？

俺は何がなんだかわからない状況に混乱している。

しかし、そんなこともお構いなしにその女が話始めた。

「あなたは死にました」

はあ？

本日二度目の混乱。

「あなたの人生はこれからでした。しかし私のミスであなたは死ぬことに・・・」

じゃ～お前のせいじゃねーか！

夢だからなのかうまく声が出せない。

「お詫びとしてあなたをほかの世界に転生させます」

いやいや、勝手に決めるなよ神様。

「そうですねえ〜どこが良いですか？」

どこがって・・・どんな世界があるかもわかんないのに良いも悪いもあるかよ。

「あなた・・・無口ですか？」

何も言わない俺に対して神様はそんなことを聞いてくる。
だから喋れないんだって！

「むう〜仕方ないです。ではルーレットで決めさせてもらいますね
！」

勝手に決めるなよ！

てか、もうなんかルーレットみたいなもの回ってるし……。

ぐるぐるぐる〜

てが多いな！

何だそのルーレット！

俺の目の前には1000以上の項目が書かれたルーレット。
俺って昔から動体視力だけは良いんだよなあ。

バンッ！

急に止まるルーレット。

そして、そこに書かれていたのは『ONE PIECE』。

え？ONE PIECEって・・・ワンピース？わんぴーす？
あの漫画の????？

「ではONE PIECEの世界に転生させますね」

また勝手に言っただが。無理に決まってるだろ・・・てか死ん
じゃうって・・・。

「あ、今のままじゃまたすぐに死んじゃいますね」

おお？

もしかして俺の心が通じたのかい？

少し嬉しい俺。

「では3つの力を授けます」

神様がそう言うと、また回りだすルーレット。

いや、それもルーレットで決めるのかよ！

「決まりました。

一つ目は漫画『めだかボックス』のキャラクターである球磨川 楔
の過負荷の力【大嘘憑き】
マイナス オールライクシヨン

。二つ目は漫画『BLEACH』のキャラクターである朽木 白哉が持つ斬魄刀【千本桜】。

三つ目は漫画『Get Backers - 奪還屋 -』のキャラクターである美堂 蛮がもつ【邪眼】。

この三つです！それでは転生〜」

神がそう言つと俺は頭が痛くなり、気を失つた。

黒瀬新くろせしんいち一。21歳。

身長172cm

体重55kg

容姿

黒髪で瞳の色も黒の日本人。
顔は上の中ぐらいのかっこよさ。

性格

優しく冷静沈着でおおらかなO型。しかしキレたら物凄く怖い一面も持つ。

能力

人並以上の運動神経とずば抜けた動体視力の持ち主。

神様から与えられた能力は【大嘘憑き】^{オルフイクション}、【千本桜】、【邪眼】の三つ。

【大嘘憑き】^{オルフイクション}

^{すべて}現実を虚構にするスキル。傷を負った現実そのものを「なかつたこと」にして傷を負う以前の状態に戻したり、自分や他者の死、視力等の五感さえも「なかつたこと」にできる（因果律に関与するスキルの為、自身の死に対しては自動で能力が発動し、死にたくても死ねない状態）。

【千本桜】

能力解放と共に刀身部分が目に見えないほどの無数の刃に枝分かれし、対象を斬り刻む。この刀身に光が当たることで桜の花弁を思わせるように見える。だが一方で、解放中は刀身が消えてしまうため、斬魄刀を通常の「刀」として使う事が出来なくなり、防御が手薄になるなどリスクも生じる。そのため力のある相手と接近戦を行う場合などには、あえて解放を行わず「刀」のまま剣技で戦うことも多い。

解号は「散れ『千本桜』（ちれ『くさばな』）」。卍解時にも唱えることがある。

【邪眼】

相手に1分間の幻影を見せる。複数人、動物にかける事も可能。2
4時間以内に3回まで、同じ人間に1度しか通用しないという制限
が有り（瞬きをしなければ同時に複数人にかける事も可）、この禁
を破ると世界から消滅し他者の記憶からも完全に消滅する。

プロローグ（後書き）

さてこれからどうなるのか・・・。
とりあえず好きなように書きたいと思います！

マジで転生しちゃったよ・・・

目が覚めるとそこはあたたかい布団の中だった。

やっぱり夢だったのか・・・？

新一がまだぼーっとする頭でそんなことを考えていると、急に現実
に引き戻された。

「目が覚めたようだね」

女の人の声。

新一は身体を起こし、その声の主を確認した。

「……………!!」

見たことがある姿。

あれは……………。

ノジコ？

なんと新一の目の前にいたのはONE PIECEに登場するキャラクターのノジコだった。

やっぱり夢じゃない・・・？

それを確認するために、新一はノジコに話しかけてみる。

「ノジコは？」

「ん？ここはココヤシ村だよ」

やっぱりそうだ！

俺は本当にONE PIECEの世界に転生してしまったのだ。

「何も覚えてないのかい？」

ノジコは俺を心配しているようだ。

俺はとにかく情報を得ようと「ああ」とだけ答えた。

「あんだ、この家の前に倒れてたんだよ？本当に何も覚えてないのかい？」

覚えていないわけじゃない。

むしろ頭も覚醒してすっかりしている。あの神様とかいっちゃんのもも……。

俺ははっきりと確信した。

本当にONE PIECEの世界に来たんだと……。

それがわかったただけでいい。

まずは、今が原作のどの辺りなのかをノジコに聞いてみよう。

「ノジコは一人暮らしなのか？」

とりあえず今の状況を知るのなら、この質問でいいだろう。

「あんたまさか……」

「？」

「変なこと考えてんじゃないでしょうね？」

なっ！！！！

質問を間違えたのか？勘違いされてしまった。

「あっはっはっは。冗談だよ！」

そういえばノジコってこんな感じだったっけ……。

「そくだねえ……。今はなかなか家に帰らない妹と二人暮らしかな」

妹……。

ナミのことだ！

ってことはまだルフィはナミを仲間にしていない……。ってことでもいいのか？

「そうなんだ。えっと……。俺、行かなきゃいけない所があるんだけど船とかあるかな？」

俺は確信を得るためにそう言う。

「……………」

あんたがどうやってこの島に来たのかはわかんないけど、今はこの島からは出られないと思ったほうがいいよ

「……」

「この島はアーロンって海賊に支配されちゃってるのぞ。」

アーロンはこの島に来る者も出る者も許さない……。だからこの島に船はないし、出て行くこととする気でもすぐに見つかって殺される」

やっぱりまだアーロンがいるのか。

ノジコの見た目は原作通り……。ってことはまだルフィは東の海イーストブルーにいるってことか。

なら……。俺のすることは、せつかくONE PIECEの世界に来たんだからルフィと旅でもするか！

やることも決まったし、ルフィを探しに行こう！

俺は短絡的にそう考えた。

「ノジコ、なんかお世話になったみたいで……。ありがとな」

「いや、それはいいけど……。まさかあんたこの島を出るつもりじゃないだろうっね？」

ノジコの表情が変わる。

「いやいや、ちょっと散歩してくるだけだよ」

俺は適当にそんなことを言っただけで家を出た。

いや、まさか本当に転生するとは……。

ん？

みかんの木の下に何か落ちてる。

俺は悪いと思ったが、みかんの木の下に手を入れてそれを手に取った。

「これは……」

そこに落ちていたのは刀だった。

「もしかして……千本桜？」

そういえばノジコは家の前に俺が倒れてたって言ってたな。
この世界に来た時にみかんの木の下に転がっちゃったのか？

しかも……。

なんのサプライズかは知らないけど、今の俺の格好は死覇装……
つまりは黒い着物だ。

さすがに隊首羽織は無かったが、まあこの服装のおかげで刀を腰に
携えることが出来た。

俺は今アーンパークに向かっている。

目的はもちろんアーンをぶっ飛ばしてこの島を出て行くためだ。

あと、この3つの力がどれぐらい使えるか……俺の強さも知りた
いしな。

普通は修行とかして強くなるんだろうけど、2年とかかかっちゃっ
たらルフィたちは魚人島に行ってしまうし……。

ぶっつけ本番が俺のモットーでもある！

もしこれで死ぬことになってもそれはそれだ。

どっちみち一回死んでるらしいし、ONE PIECEの世界で楽しむためには強さがある。

アーロンを倒せたらそこそこ強いだろ！

とりあえず今のゾロやサンジより強いってことになるしな。

そんなことを考えながら歩いているが、まったくアーロンパークにたどり着かない。

「……………」

どこにあるんだ？

たしかココヤシ村から近かったような……。

「あゝあゝ、空でも飛べる能力にしてほしかったよ」

すでにやる気をなくしてる主人公・・・。

「てかなんでココヤシ村からなんだよ！こつこついつのっていきなりル
ファイ発見！とかなるんじゃないの？」

「あ」

そんなことを言っていたらアールンパークが見えてきた。

「やべえ・・・緊張してきた」

三つの力を貰い最強かと思われた主人公だったが、心は一般人な新
一だった。

「やっぱり死にたくねえー」

マジで転生しちゃったよ・・・(後書き)

結局新一はアロンと戦うんですかねえ？

実際に転生したら絶対戦わないと思います。
だってアロンとか恐すぎじゃん？笑

新一、初めての戦い

とつとつ来てしまった。

新一は今、アーロンパークの入り口前に立っている。

「行くか・・・」

意を決してそう呟くと扉わゆっくり開く。

おじやまします・・・。

心の中でそう言う。

口には出さないぜ？

だってかっこ悪いじゃん！

「ああん？」

扉を開けた先にはアーロンがこちらを睨んでいる。

恐えええええええええ

「なんだてめえは？」

さらに声を荒げて言うアロン。

まあ、いきなり嫌いな人間がやってきたら機嫌も悪くなるだろう。

そう考えていると、モブキャラである魚人が新一に近付いてきた。本来ならルフィたちに一瞬、一コマで瞬殺される程度の奴らだ。

でも実際見たらめっちゃ怖い！

しかしそんな思いを悟られてはならないと、俺は強気な態度を取る。

「お前らがこの島を支配してるアロン一味か……悪いけどお前らを潰させてもらおう」

言った――――！！

うっわ、凄い顔でアロンに見られてる……。。

でももう後には引けない。

俺はゆっくりと千本桜に手をかけて、そして刀を抜い………
抜けねえ！！

あれ??

そういえば刀って素人が抜くのは難しいんだっけ？

やたら堅いんだけど……。

やばい！このままじゃめっちゃかっこ悪いじゃん！

くっそ〜こんなことなら来る前に練習しとくんだった……。
ぶっつけ本番が仇になってしまったよ。

ん〜もしかして角度とか関係あるのかな？

俺はアーロンたちにバレないようにそっと刀を引き抜こうとした。

カキン……。

お？

なんかわかんないけど抜けた！！

「そんな物騒なものを持って何するんだ？」

アーロン一味のモブキャラたちが新一に近付いてきた。

えっと……確か解号は……。

「散れ……千本桜」

新一がそう言うと千本桜の刀身が消えた。

「……刀身が……消え……」

モブキャラやアーロンたちも驚いている。

その瞬間、モブキャラたちが千本桜によって斬り刻まれた。

うっ……。

予想以上にグロい……。

俺の周りではモブキャラたちが血塗れになって倒れていく。

てか勝手に斬り刻まれたけど……まあ、初めてだしコントロールできないのも当然か？

あ、ここはかっこつけるとこじゃね？

「俺はアーロンに用があるんだよ。雑魚は引っ込んでな」

言っちゃったぜ！

ってかめっちゃアーロンが睨んでる。

「てめえ……よくも同胞を……」

アロンはそう言いながら座ってたイスから立ち上がった。

で、でえー！！

俺の倍はあるんじゃないか？

そう思わせるほどアロンの身長はでかい。

「アロンさん・・・あなたは座っててくれ」

お、ハチ、チュウ、クロオビの三人の幹部が出てきた。

痛え・・・。

俺は三人の幹部に瞬殺された。

「シャッフハッフハ。どうやら口だけの男だったようだな」

アーロンが笑っている。

「さてこの男どうするか・・・」

クロオビは腕を組みながら言う。

「・・・殺せ」

アーロンが不敵な笑みを浮かべながら新一を見ている。

「この下等種族は俺の同胞を亡き者にした。こいつは殺して、捨てとけ」

アローンのその言葉を聞いたハチは倒れている俺に近付き「ニユ、何か言い残すことはあるか？」と聞いてきた。

俺は薄れゆく意識で「雑魚が・・・」とだけ言った。

雑魚はどう見ても俺の方なんだが、最後までかっこよくいたいと思っただけに出た言葉だった。

ザクツ・・・

ハチは持っていた剣で新一の身体を突き刺した。

「シャーッハッハ、少しは気分もすっきりしたぜ。

だが、まだまだ！このままココヤシ村にでも行って、あと2、3人ぶち殺してやるか・・・」

「チユ、それはいい考えだ」

そしてアーロンたち4人はスタスタと歩きだした。

あれ？

生きてる・・・。

新一の意識が戻る。

そうか！大嘘憑オウルフイクションきが発動したんだ！

なるほど、なんとなくだけでも発動の仕方が理解できた。

右手には千本桜もある。

「散れ．．千本桜」

バシユウウウウウ！！

「！！！？」

千本桜が八チ、チュウ、クロオビを斬り刻む。

そして俺はゆっくりと立ち上がる。

いきなり3人が血だらけになって倒れたので、アーンは何が起きたのかわからない。

だが、後ろに感じた人の気配に驚愕した。

「どついうことだこりゃあ」

アーンはキレた時の目で新一を見た。

めっちゃ怖いけど・・・やっぱりこは括弧つけるべきだろう？

『オールフイクেশヨン
大嘘憑き！』

『俺の絶命を・・・なかったことにした！』

マネさせてもらったよ球磨川。

でもここからは俺の戦いだ。アーンとの一騎打ち。

この戦いで力をコントロールしてみせる！

新一、初めての戦い（後書き）

いや、次はアールンとの戦いですが、どんな戦いになるのか。

ルフィたちはいつ登場するのか。

まったくわかりません！笑

長い目で見てやってください。。。

隙だらけの戦い

【そういえば卍解ってどうやるんだ？

確か卍解取得には本体の具現化と屈服が必要だったはず・・・。

卍解とは・・・。

本体の具象化と屈服が必要。

斬魄刀解放の二段階目。始解同様に変形、特殊能力の付加などが伴うが、基本的に始解の能力・特性を強化したものである場合が多い。戦闘能力は一般的に始解の5倍から10倍と言われており、その強大さ故に斬魄刀戦術の最終奥義とされている。

また、卍解修得者は、斬魄刀の名を呼ぶ事なく始解することも可能。卍解に至るのは才能のある者でも10年以上の鍛錬が必要とされ、卍解修得者は例外なく尸魂界の歴史に永遠にその名を刻まれる。

具象化とは、対話の際に死神が精神世界に赴くのではなく、斬魄刀の本体を死神のいる世界に呼び出す事。卍解に至るのが困難とされる理由は、具象化に至るのが困難なためである。具象化した斬魄刀の本体を倒す事を斬魄刀を屈服させると言い、これに成功して初めて卍解を修得できる。

千本桜・・・卍解形態。

せんぼんざくらかげよし
千本桜景蔵

斬魄刀を地面に向けて落とすと同時に解放。落ちゆく斬魄刀は地面に吸い込まれるように沈み、直後、所持者の背後から大量の巨大な刀の刀身が生え、それが塵のように舞って散る。「目に見えないほど小さい千本の刃」が能力である千本桜の刃がさらに増え、総数・億を越すほどの膨大な刀を出現・操作する。

見えない刃で斬りつける本来の用途以外にも、刃を圧縮して殺傷力の高い剣を造り出したり、相手を無数の刃で球状に囲んで逃げ場を無くしたりと非常に応用が効く。

この千本桜も同じようにしなきゃダメなのか？

それだと才能ある者でも10年はかかるって言われてるんだから無理じゃね？

でも始解は解号を言っただけで発動させることが出来た。もしかしたら卍解も意外と簡単にできるんじゃないか？

新一は刀の切っ先を地面に向けて「卍解！」と言って千本桜を地面に落としてみた。

キンッ．．．。

新一が落とした千本桜は重力に逆らうことなく地面に落ちた。

「やっぱり無理かあ．．．」

いや、もう一回やってみよう！

次はもっと集中して、よくわかんないけど力を入れる感じで．．．。

新一はぶつぶつと何か言いながら千本桜を拾い、何に集中しているのかわからないが、とにかく集中した。】

「どついうことだこりゃあ」

アーロンはキレイな時の目で新一を見た。

『オールフイクション
大嘘憑き!』

『俺の絶命を．．．なかつたことにした!』

同胞がやられてキレてしまったアロン。

新一を睨みながら体に入力を入れる。

『シャーク
鯨．．．オン・ダーツ
ON・DARTS!』

アロンはそう叫ぶと新一を目掛けて頭から突進してきた。

「はっや．．．!」

ザクッ!!

アーロンのノコギリのような鼻が新一の心臓を突き刺す。

鼻に突き刺さった新一を地面に叩きつけるが、新一は「大嘘憑き」オウルフイクションと言って立ち上がった。

新一はアーロンに対抗しようと千本桜を解号させようとするが、アーロンの鮫シャーク・オン・ダーツ・ON・DARTSが速すぎて反撃できないでいた。

アーロンも千本桜の力を見ているので警戒しているのだろう。攻撃の手を休めずに新一を即座に、何度も殺していく。

しかし、何度殺しても立ち上がる新一にアーロンは苛立ちを隠せない。

しかし同時に、新一がなんらかの理由で死なないことを確信するアーロン。偉大なる航路出身の彼は新一が“悪魔の実”ケランドラインの能力者であると推測した。

不死身・・・そんな能力があるのかと疑問も感じたが、実際に死なない新一を前にしてそんな疑問は無意味だと悟った。

「死なないということにはわかった・・・だがこの俺が下等種族である人間に負けるわけがない」

アーロンはそう言うと新一を掴んで持ち上げた。

それと同時に新一が持っている千本桜を奪い、海に沈めた。

「死なないというのならこのまま殺さずに生かしてやる！」

新一がアーロンの言葉を聞いたのはここまでだった。アーロンが新一の首に手刀を入れて気絶させたのだ。

【よし！卍解は出来た。

あとは白帝剣はくていけんにしてみよう。

新一は卍解が出来た喜びからなのか、軽い感じでやるうとしていた。

終景しゅうけい・白帝剣はくていけん。

千本桜景巖の全ての刃を押し固め、一振りの究極の剣にした形態である。

「終景・・・白帝剣！」

シューウウウウウウウ・・・】

アーロンが新一を持ち上げてしばらく経った。

（どうやら復活しねえようだな）

新一が復活しないことを確認するとアーロンの口角が上がる。

「シャーツハツハツハ、これで安心だな。このままどこかの土にでも深く埋めれば復活してもまたすぐに死ぬだろう」

どうやら無限に繰り返す死を考えているようだ。

確かに大嘘憑オルフィクシヨンきでもこれなら復活できないだろう。

まあ、土をなかったことにすれば助かるかもしれないが、さすがにそれは新一には出来ないだろう。

アロンは新一をとりあえず地面に叩きつけ、指定の椅子であるところ場所に座る。

「シャーッハッハッハ」

「・・・一分」

パキ・・・

パキパキパキ・・・

パリーン！！

ザクツ・・・。

「・・・！！！！？」

今までアールロンがいた世界がまるでガラスのように砕け散り、白帝

剣でアーロンの腹部を刺している新一がアーロンの目に映った。

「お前が今まで見ていたのは幻だ……。残念だったな、アーロン」

俺はまんまとアーロンを出し抜いたことでテンションが上がり、クールなキャラを演じていた。

ふっふっふ……。決まった。

「ふっ……。下等種族が……。一体いつから……」

アーロンは口から血を吐きながらも聞いてきた。

「お前がキレて俺を見た時さ……」

俺のその言葉を聞いてアーロンは倒れた。

隙だらけの戦い（後書き）

なんかアーロンのキャラが崩壊しすぎ？でしたね・・・泣

説明も多くてすみません。でもお気に入り登録が多くて作者は嬉しいのです！笑

テンションだけで書いてる感じもありますが・・・こんな作者でもよろしくです！！

新たな力

勝った・・・???

アーンに・・・

「勝ったんだーーーーー!!!」

俺は嬉しすぎて思わず叫んでしまった。

これで俺もONE PIECEの世界の住人としてやっていけると
思った。

そんなに甘くはないのにな?

ドゥルルン!

「？」

突然目の前が真っ暗になった。

え？

なになに??

「この世界を大いに楽しんでいるようだね」

新一の目の前に現れたのは、この世界に転生させてくれて三つの力までくれた神様だった。

「え？な、何？」

いきなりのもので動揺する新一。

「やあやあ新一くん。実は君に言い忘れたことがあってね・・・」

言い忘れたこと？

「何ですか？」

俺は恐る恐る神様に聞いてみる。

「実は君がこの世界で原作キャラを倒すたびに新しい力をあげる！
・・・という言い忘れたんだよ」

．．．新しい力？

おおおおおおおおお！！

めっちゃラッキーじゃん！

ってことは俺はもっと強くなれるってこと？

「じゃ、じゃ、そうですねえ」

俺はどんな力にするのか悩んでいる。

「あ、ちょっと待って！」

「？」

神様は考えている俺の横に巨大なルーレットを出した。

「え．．．まさか．．．」

「そう！最初がルーレットだったんだからこれからもそうしよう
思っで」

．．．やっぱり？

人生はそんなに甘くないと思った新一。

がっかりとしている新一を無視するかのようにルーレットが回りだ
す。

くっそー！！

これじゃーまたどんな力を貰えるのかわかんないじゃん！

最初に貰った力は俺も原作読んでたからなんとか使えたけど．．．
．．．全然知らない漫画とかになったらどーすんだよ。
俺はぶつぶつと文句を言いながらもルーレットが止まるのを待った。
力が貰えるのは素直に嬉しいしね。

ダンッ

どうやらルーレットが止まったようだ。

「決まったね！では四つ目の力は・・・」

今さらだが俺にはルーレットで何が出たのかはわからない。
というのも書いてる字が読めないのだ。

いや！

決して俺が日本語が読めないほどの学力ではないぞ？

字が日本語ではないのだ。

「四つ目の力はゲーム『ポケットモンスター』の技から・・・」

え？

ポケットモンスター??

って・・・ポケモン!?

もう嫌な予感しかしないよ・・・。

「【はねる】に決定しました!」

ギヤヤヤヤヤ――――!!

【はねる】

はねるだけで何も起こらない。ポケモンシリーズ最弱の技。

せめて……

せめて…………ほえるでしょーーーがあーーーー!!!

「じゃあ、帰るね!」

そう言って神様はどこかに消え、新一は涙目でアロンパークを見つめていた。

トントントン…………。

トントントン…………。

「…………とりあえずココヤシ村に帰ろう」

新一は何回かはねた後、ココヤシ村に向けて歩きだした。その道中で千本桜を鞘から抜く練習をしようと決意したのは言うまでもない。

新一がアロンパークの入り口に差し掛かった時、誰かの叫ぶ声が

した。

「おーーーーい、お前!どけよ!」

ん?

子どもの・・・声?

「俺はアーロンを殺しに来たんだ!」

「俺の父ちゃんはアーロンに殺されたんだ!どかないとお前だつて殺すぞ!?!」

俺は入り口の扉から外の様子を見てみた。

ああ。

そつえばあんな子どももいたなあ。

俺が見たのは黄緑色のニット帽にオレンジ色のTシャツ。そのTシャツには『今』と書かれている。

あれは．．．ナミ！

その少年の目の前にはバックを肩に担いだナミが立っていた。
少年は剣を両手で持っており、涙を流し、震えながらナミに向かって叫んでいる。

え．．．と、ここにナミがいるってことはもうルフィはこの島に向かっている？

しかもウソップやゾロは島に着きそうなんじゃないか？

俺はそんなことを考えながらも今後の展開を必死に思い出した。

（原作通りなら！）

その子どもにイラッとしたのか、ナミは胸元から組み立て式の木の棒を取り出してその子どもを殴ろうとする。

パシ．．。

「やめなよ」

なんとか振り上げられた木の棒を掴むことに成功した。

てかめっちゃ痛え．．．。やっぱりナミは力があるなあ．．．。

殴られずにすんだ子どもは目を見開いて俺を見ている。

「あんだ・・・誰？」

ナミが俺の方に振り向いて言う。俺は木の棒を離してナミと向き合った。

「魚人たちなら俺が壊滅させたよ」

いきなりの俺の言葉にナミは動揺しているようだ。

「はあ!？」

やはり信じられないのだろう。
まあ、当たり前か・・・。

「信じられない？」

「あ、当たり前よっ!！」

だろうね。だけど・・・

「ならこの扉を開けて見てみなよ？」

「……………」

ナミは何故かそこから動かない。

先に動いたのは少年だった。

少年は泣いていた顔もすっかり晴れ、扉に向かって走って行った。パンツと開かれた扉を少年とナミは無表情で見ている。

二人の目に飛び込んできたものは血だらけになり、倒れている魚人の数々。

その中にはアローンもいた。

「うそ……………」

ナミはその光景を見てうつすらと目に涙を浮かべている。

少年は俺たちの方に振り返り、笑顔で言葉にならない声を出していた。

先ほどまでまるで怒った顔をしていたナミがまだ信じられないという言葉を発しながら顔に手を当てて泣いている。

今思ったけど……………」

実物のナミめっちゃかわいいじゃん!!

俺はその場に不相应な思いを押し殺して……ないけど、なんとか堪えてナミに話しかけた。

「泣いてるところ悪いけど、あんたにいくつかの願いがあるんだ」

「え？」

あ、今思い出した……あの少年の名前……チャボだ!!

新たな力（後書き）

最後はどうでもいいですよねぇ。笑
でもなんとなく入れたかった！

いやぁ〜やっとな？原作に介入出来そうです。。。

まあ、結構早めでしたね。。。。

次はルフィ出せるかなあ？

それは、次章のお楽しみで！！

ナミへのお願い

「俺、みんなに伝えてくるよ!」

そう言っつて少年・・・チャボは走って行ってしまった。

チャボを笑顔で送り出した俺にナミは話を戻すように言っつ。

「本当にアーロンたちをあんたが一人で?」

まだ信じてなかったのか・・・。

「ああ、そっだよ」

「そっか・・・・・・ありがとう」

最後のお礼の言葉は小さく言っつてたけど聞こえていたぜ。

俺はそんなナミに微笑む。

ナミはそんな俺を見て「な、何よ?」と強めに言っつていたが、怒っつていないことはすぐにわかつた。

「それで・・・私に頼みって？」

ああ、そうだった。

俺はナミにいくつかの頼みがあると言ったんだ。

「まず一つ目は、海軍を呼んでくれないか？」

俺はこの世界に来たばかりで海軍への連絡方法もわからないし、アーロンたちをこのまま放置しておくわけにもいかないだろう。

「もちろんあんたがアーロン一味ってのは黙ってるからさ」

俺はそう付け足すと、ナミは「わかった」とだけ言った。

とりあえず俺の頼みとやらを全部聞きたいのだろう。

しかしその時、4人の男が現れた。

「??？」

「.....」

俺たち2人の前に現れたのはあの海軍大佐のネズミだった。

こいつかあゝちょうど良かった！

「チチチチ.....今日は何というラッキーデー。戦いの一部始

終を見させてもらった」

え？

こいつ見てたの？

あ、そうか．．．原作ではアロンに金貰いにきてたんだっけ。その後でナミの家に押しかけるんだっただか？

「まぐれとはいえ、貴様のような名も無い奴に魚人どもがよもや負けようなどとは思わなかった」

うん、大正解！

完全にまぐれでした。

「だが、おかげでこのアロンパークに蓄えられた金品は全て私の物だあ！

貴様の手柄、この海軍第16支部大佐ネズミが貰った！」

うわあ〜なんか凄い興奮して喋ってるよコイツ．．．。

「ナミ。一つ目を取り消して、コイツをぶっ飛ばしてくんね？」

俺のその言葉にナミはすぐにOKした。
ナミもムカついてたんだなきつと・・・。

「お、お前ら・・・俺に手を出してみる・・・ただじゃすまない
からな！」

え？

。まだ何もしてないのに、ナミが武器出しただけでビビってるよ・・・
。本当に大佐か？

ドガッ！

あ。

バキッ！

デュクシュ！

と言ったので、ナミはネズミの髭を離した。

「覚えてろよ黒服の男！」

ええ？

俺じゃないだろ！ナミだろ！

と心の中で思ったが当然口には出さない。

「お前のことを調べ上げてやるからな！」

あ、このままじゃルフィが賞金首にならない？

そう考えた俺は、ネズミの耳元で「俺たちは海賊だ。船長はモンキ
ー・D・ルフィ。麦わらの一味だ」と小声で言った。

それからネズミは何かを叫びながら俺たちの前からいなくなったが、俺はもうどうでも良かったためにほとんど聞いてなかった。

さてと……。

「急な邪魔が入ったけど、続けるぜ？」

「え？あ、うん」

ナミは思い出したかのように俺の方に体を向き直した。

「えっと、二つ目はあんたが麦わらの一味に入ること」

「!?!?」

ナミはなんであんたがそんなこと……とでも言いたいのだろうか、俺はすかさず次の頼みを話す。

「三つ目は俺について何も聞かない」

「……………」

この言葉でナミは俺に言いたいことを止めたのだろう。開こうとした口を無理矢理閉じた。

「最後に．．．俺は妻わらの一味に入りたい。そこで、ルフィにあんたが口添えしてほしい」

「どうして．．．」

ナミが何か言おうとしたので、俺は「俺について何も聞かない」と念を押した。

「ダメな頼みはあるかい？」

俺がそう言つとナミは少し考える素振りを見せたが、すぐにすべてを了承してくれた。

「あんたには大きな借りがあるしね」

そう言つてナミは右手を差し出した。

「私、ナミ！ルフィの仲間になるなら、私とも仲間ってことよね？」

俺はナミの右手を取り・・・。

「黒瀬 新一。よろしくな・・・ナミ」

「シンイチ？なんか呼びにくいわね・・・」

そう言うとナミは俺に背を向けて歩き出した。

「何やってんの？早く村に行くわよ、シン！」

どうやら俺はこの世界でシンと呼ばれることになるんだろうなあっ
と思いつつもナミと一緒にココヤシ村に向かった。

その道中で「ココヤシ村っていう村があるんだけど」と、ナミは
嬉しそうにココヤシ村について俺に教えてくれた。

まあ、ココヤシ村は知ってるんだけどなあ〜っと思いつながらも、ナ
ミから聞く話は原作にはなかった話などもあったので新鮮で退屈せ
ずに歩けた。

しかし、時折左肩を見て悲しい顔をしていた。

そっか・・・俺がアローンを倒したことによって、ナミはこの左
肩をナイフで刺さない。

一生消えない刺青がナミを苦しめるのなら……………。

「ナミ、ちょっと目を閉じてくれない？」

「え？なんで？」

まあ、いきなり目を閉じては不自然だったか？

「いいから5秒だけ閉じて」

ナミは少し疑い「変なことしないでしょうね？」と言いながらも目を閉じてくれた。

目を閉じたのを確認した俺はナミの左肩に触れた。

ナミは一瞬身体を固まらせたが、俺が開けていいよと言うと安心した顔を見せた。

「これ……………一生消えないのに……………えっ!？」

目を開けたナミは自分の左肩を触ろうとして動きが止まった。

「な、なんで??刺青が……………」

そう。

みんなもご存知の『オールフィクション大嘘憑き』だ。

でもまだナミには言わないけどね!

「これ、シンがやったんでしょ？」

ナミが掴みかかるんじゃないかと思われるほどの勢いで近付いてきたので、俺は「さあね」とはぐらかした。

このやりとりはココヤシ村に着くまで続いたが、俺は最後まで言わなかった。

ナミへのお願い（後書き）

なんか全然進んでないような・・・笑
なので1日に出来るだけ更新したいと思います!!
みなさん、よろしくです

道化師？

ん．．．。

「あ、ここは．．．」

一人の男が深い眠りから覚める。

「アタシん家だよ」

気がついた男に女が話かけた。

「へ？へえ？」

「気がついた？」

「あ、お前は．．．」

「アタシはノジコ、ここでみかん作ってんの」

どうやらノジコとウソップのようだ。

ゴサの町で魚人と遭遇したウソップはノジコを助けるために魚人と戦おうとしたが、逆にノジコに気絶させられて今に至る。

原作ではここにゴサの子ども．．．チャボもいたが、ここにはいない。

「おーーーーーい、みんなあーーーーー」

ウソップとノジコが話していると村中に聞こえる声で子どもが叫んでいる。

村から離れた位置にあるノジコの家にも声が届いているのがその証拠だろう。

「な、なんだ!?!」

ウソップが何事かと立ち上がって窓から外の様子を見ている。もちろんここからは何も見えないのだが……。

「……………」

ノジコも村の方から聞こえる元気な声に、違和感と興味からか耳を澄ませている。

アーロンがこの島に来てから、誰もこんな元気で嬉しそうな声を出したことがないのだろう。

おおおお おおおおお!……!!

村の方からまるで地響きが起きるのではないか？というほどの村人たちの声が聞こえる。

何かあったのか・・・ノジコはそう考え、急いで家を出て村に向かった。

その行動を見ていたウソップもノジコに次いで家を出る。

「何かあったの？ゲンさん!？」

ノジコは村に着いてすぐに近くにいたゲンゾウに聞く。

「おお、ノジコ!！」

ゲンさんもなんだか嬉しそうな顔をしてノジコを見た。

「聞いて驚くなよ?。」

「な、なに?。」

ノジコは何が起こっているのかわからないため、不思議そうに聞く。その時、ノジコの後を追っていたウソップも村に到着した。

「あのアーロン一味が壊滅したそうだ!!」

「ええ!？」

ノジコは信じられないと言った感じでゲンさんを見ている。

「我々も今この子から聞いたんだが・・・」

そう言っつてゲンさんはチャボを見た。

「あの子が？」

ゲンさんの目先にいる子どもをノジコも見た。

「でも、どうして・・・」

ノジコがそう呟くと、チャボはここにいる全員に聞こえるように「俺、見たんだ! 魚人が血だらけで倒れてるところを!!」と言う。

村人もチャボの言葉を信じていないわけではないが、全員で確認しに行くことにした。

一人一人が念のため武器を持ち、今まさにアーロンパークに向かおうと一歩踏み出したその時、アーロンパークへの道から歩いてくる2つの人影が見えた。

「ねえ！どうやってあの刺青を消したのか、いい加減教えなさいよ」

ふう〜・・・。

ナミってしつこいんだなあ・・・。

さっきまで嬉しそうに昔話してたじゃないか。

ん？

ココヤシ村に人が集まっている。

ああ、チャボがみんなに知らせたんだった。

俺はナミの質問を回避しようと「ココヤシ村に人が・・・」とナミに話しかけた。

「わかってるわよそんなこと！」

見ればわかる。っというようにナミが言う。

ココヤシ村に足を踏み入れた俺たち2人に村人たちが走って寄って来る。

俺たちつてかナミにだが……。

ノジコだけは「アンタ……」と俺に気付いてくれた。

村人たちはナミに魚人のことについてとかいろいろ聞いている。

魚人たちの壊滅がナミの言葉によって確定したので、村人たちは涙を流しながら喜んでいる。

今夜から騒がしくなりそうだ。

俺が少し離れたところからナミや村人たちを見ると、アーロンパークの方から大きな音がした。

しかし、村人たちは特に聞こえていなかったのか気にするような素振りは見えない。

俺も特に気にしなかった。

ん？

いつの間にかウソップが俺の横にいた。

近くで見るとやっぱり鼻が長い。俺は衝動的にウソップの鼻を掴む。

「って何してんだデメー！！」

おおーウソップの初ツッコミだ。

それからウソップにガミガミ言われたが、俺は愛想笑いで受け流す。

「ナミーーーー！！！」

突然聞こえた大きな声に今まで騒がしかった村人たちも静かになった。

「ルフィ！！！」

俺の隣にいたウソップが声の主に反応して言った。

生ルフィだ！！

俺はルフィを見て感動したが、顔には出さずにルフィを見ていた。

それから数時間が経ち、夕方になったココヤシ村にはアールン一味の壊滅の知らせを聞いた島中の人間が集まって宴会をしている。ルフィたちも何かなんだかわからないのに宴会に参加しているところを見るとさすがと言っべきか……。

もちろん、ココヤシ村に到着したルフィの仲間のゾロは“鷹の目のミホーク”との戦いでついた大きな傷の手術。そんなゾロも手術終わりの体で宴会に参加していた。

「ルフィ！」

俺は生ハムメロンを探していたルフィに声をかける。もちろんナミも一緒だ。

ルフィは両手に肉を持ちながら「ん？誰だオメー？」と俺を見てそう言う。

「俺をルフィの仲間に入れてくれないか？」

単刀直入に言った。

ルフィが俺をまじまじと見ている。

．．．．肉を食いながら．．．。

「ルフィ、私からもお願い！シンは私たちを救ってくれたの！悪い奴じゃないってことは私が保証するわ！」

俺の横にいたナミがそう付け足してくれた。

ルフィは食べている肉をゴクリと飲み込むと「お前シンって名前なのか！いいぞ！」と言った。

軽っ！！

さすがルフィだ。

こうしてルフィたちの仲間になった俺は後々ゾロたち3人も紹介された。

ウソップには「もう鼻を掴むなよ？」と言われたが、それは約束できかない。

そして数日後の朝、ココヤシ村の村人たちに見送られて麦わらの一味は出港することになった。

地味にヨサクとジョニーも挨拶していたが、俺はそういえばいたんだ・・・という感想しか持たない。

メリーに感動しすぎて忘れてたよ。

もちろんあの宴会の時にノジコとも話をした。

俺を助けてくれた？お礼の言葉とある約束をノジコと話したのだ。

それからナミが俺のことを村人たちに話したことによって、宴会は俺にお礼を言いたいという人たちで溢れかえった。

おかげでほとんど寝れずに今に至るわけだが…………。

「船を出して!!」

そんな中で不意に響いたナミの声に、意味が分からないながらも俺たちは船を出した。

村人達に礼を言わせる事も、また別れを言う事も無く行ってしまふのかと、船に向かって走り出すナミを皆が止めようとするが、彼女は人々の間をすり抜けると一気にゴーイングメリー号に飛び移る。

そしてTシャツの裾を上げ、村人+ジョニー・ヨサクの全員から盗んだ財布を甲板に落として見せた。

「皆、元気でね」

「やりやがった、あのガキヤ ツ！！！！！」

ここは原作通りなんだと思うと感動してしまうシン。

そんなナミに泥棒猫とか、財布を返せとか、そんな言葉に混ざって、いつでも帰って来い、元気でやれ、そんな風に村人たちは叫んでいる。

彼らもまた、それがナミらしさであり、これから楽しんで欲しいと思うからこそそう言ったのだろう。

ナミは満面の笑みを浮かべ、叫ぶ。

「じゃあね、皆！！！！行って来る！！！！」

船から見たアーロンパークは粉々に崩れていた。

そう思った後ろでルフィたちが「あれ、魚人たちの家だったんだな」などと話している。

もしかして原作とは違う場所のアーロンパークに船ごと突っ込んだのか？と思ったが口には出せないよな？

そして、ココヤシ村出港から数日が経った。

俺たち麦わらの一味は“グランドライン偉大なる航路”を目指し、船を進めている。

ウソップは後ろの甲板で“タバスコ星”とやらを開発中だし、サンジはナミが故郷から持ってきた蜜柑の木の警備をしている。

どうやらルフィがその蜜柑を盗もうとしたので警備しているようだ。

ナミは買ったばかりの新聞を読み進め、ゾロは甲板で一人、昼寝の体制に入っている。

俺は特にすることもないので、アーロンパークからの帰りの道中に出来なかった千本桜の出し入れの練習を誰にも見つからない所でし

ていた。

ん〜やっぱりあれはまぐれだったか・・・。

全然抜けねー！。

その時、「」「」「ああああ　　っ！！！」「」「」「」という声が船に響き渡った。

俺はルフィたちの所に駆けつけると、みんなが見ている紙に視線を落とした。

「なっはっは！見る、シン！俺たち“お尋ね者”になったぞ！」

そこには2枚の手配書があった。

モンキー・D・ルフィ
(麦わらのルフィ)

懸賞金：3000万ベリ

これは原作通り・・・あとの1枚は・・・。

クロセ・シンイチ

(道化師)

懸賞金：2700万ベリ

おお！！

俺も賞金首に！！

でも道化師って・・・。

おそらくアールロンとの戦闘を見ていたネズミのせいだろう。

サンジとウソップは新入りがいきなり懸賞金がついた俺に納得がいかないようだったが・・・。

ウソップはルフィの手配書に写っている自分の後頭部を発見して満足しているようだった。

俺たちが手配書で騒いでいると、ゾロが「おい、島がみえるぞ」とナミに言った。

「あの島が見えてきたってことは、偉大なる航路クランドラインに近ずいてきたってことね」

ナミはルフィたちに説明するように言う。

「あそこには有名な町があるの。」

『ローグタウン』・・・別名、“始まりと終わりの町”。かつての海賊王、ゴールド・ロジャーが生まれ・・・そして処刑された町。

・・・行く?」

ルフィはそのナミの言葉に「行く!」とだけ言った。

そして俺たちはローグタウンに上陸する。

道化師？（後書き）

なんかあれよあれよと言う間にルフィの仲間になってしまいました。笑

今回はローグタウンまで書きたかったので少し長く、そしてちょっと薄くなってしまいました．．．泣

でも、今の俺ではこれがベストです！

シンの感情ももっと入れたかったのですが．．．まあいいでしょう！笑

あ、これから新一のことはシンに統一させますね。。。

でも、黒瀬 新一という名前は忘れないであげてください！笑

海軍大佐スモーカー

「うっひょー！でっけえ町だなー」

ローグタウンに上陸した俺たち6人は大きな門の前にいる。

「かつては偉大なる航路グランドラインへ向かう海賊たちで賑わった町よ。必要なものな何でも揃うわ」

ルフィが言った後にナミがローグタウンについて教えてくれた。

そして各々買い物があるようでウソップは装備集めに、サンジは食料の補充と．．．ナンパもするらしい。

ゾロはナミにお金を借りて新しい刀を買うようだ。利子は3倍なのはかわいそうだったが．．．。

「あ、ナミ．．．実は俺も買いたい物があるんだけど．．．」

俺はゾロとナミの会話を聞いていたので利子のことも考えたが、生活に最低限必要な物は揃えたかった。

「シンならいくらでも貸してあげるわよ?というより返さなくてもいいわ!」

「!?!」

それを聞いたゾロはナミに猛抗議したが、ナミは考えを変えなかった。

そっか・・・6個目の・・・。

俺はあることを思い出し、ナミのその言動にも納得した。
もちろん、ナミの故郷を救ったお礼なのかもしれないが・・・。

そしてルフィは、特に買い物はないので処刑台に行くらしい。

結局全員がバラバラの行動をすることになった。

バンツ！

「スモーカー大佐！大変であります！！」

ローグタウンにある海軍基地あの海兵がそう言いながら部屋の扉を開けた。

部屋の中は煙で真っ白になっている。

その部屋の中にスモーカー大佐という人物がおそらくいるのだろうが、煙でよく見えない。

「本部より連絡です。モンキー・D・ルフィ率いる海賊の一味がこのローグタウンに向かったと情報がありました。
イストブル
東の海の3000万と2700万の賞金首が出た海賊たちです！」

海兵がそう言うと、中にいたスモーカーが口を開く。

「3000万と2700万……こりゃくめでてえこった」

「首領・クリークや魚人アロンすら倒した凶悪極まりない悪党です！」

「静かにしろ!!」

海兵がそう付け足すが、スモーカーに一喝された。

ガラガラガラ．．．。

スモーカーはどうやら石積みのようなことをしていたようだ。しかしその石が崩れてしまった。

「ああ．．．」

そう言いながらスモーカーは立ち上がる。

「でけえ声出しやがって！壊れちまったじゃねーか」

その石が壊れたのを海兵のせいにするスモーカー。そう言われた海兵は律儀に「すみません」と言う。

「ダメだな．．．気がはっちまってよ。俺には俺のペースがある．．．」

「そうだろ？」

「は、はい」

そしてスモーカーは窓を開けて部屋中に広がっていた煙を外に逃がした。

「で？なんだった？」

ふう・・・。

とりあえず生活に必要な物は揃ったな。

俺はある程度の買い物も済ませて、これからどうしようか考えた。

本当は誰かに同行して見たかったこともあるんだけど……。
ゾロの武器屋での行動とかさ。

まだ雨は降ってないから事件は起きないだろうし……。

とりあえず俺は近くにあったベンチに座った。

ココヤシ村でのことでわかったことがある。

まず、原作キャラを倒すことで他の漫画のスキルを神様から貰うことができる。

ただしモブキャラではダメ……最低でも原作で重要なキャラ付けがされているキャラじゃないとダメだということはアローン一味で確認出来た。

そして貰えるスキルはランダムに決められる。

これが厄介なんだよなあ……。

今あるスキルでも十分だけど、あと一つ欲しいスキルがある。

それは身体的な力だ！

いくら大嘘憑オールフイクションきで死なないからといっても、基本的な戦闘力は欲しい。

最低でもこの世界のモブキャラぐらいは動きたい。

アローンの時もそうだったけど、せめて相手の攻撃を避けられるぐらいのスピードは身につけたいな……。

今あるスキルは7つ。

その内使えるのは最初に貰った3つだけか……。

『はねる』もジャンプ力が上がるわけでもない……ただ本当に文字通りはねるだけの力だったしなあ〜。

あ。

シンの目の前にはあのスモーカーの姿があった。

どうやら女の子にアイスをつけられるあのシーンのようだ。

やっぱりスモーカーは優しいな。

俺はそんなことを思いながら、その光景を見ていた。

くろせしんいち
黒瀬新一。21歳。

身長172cm

体重55kg

容姿

黒髪で瞳の色も黒の日本人。
顔は上の中ぐらいのかっこよさ。

性格

優しく冷静沈着でおおらかなO型。しかしキレたら物凄く怖い一面も持つ。

能力

人並以上の運動神経とずば抜けた動体視力の持ち主。
誰にも気付かれないほどのポーカーフェイスが出来る。
神様から与えられた能力は【大嘘憑き（オールフィクション）】、
【千本桜】、【邪眼】の三つ。

麦わらの一味での役割は不明。

【大嘘憑き】 オールフィクション

すべて なかつたこと
現実を虚構にするスキル。傷を負った現実そのものを「なかつたこ

と」にして傷を負う以前の状態に戻したり、自分や他者の死、視力等の五感さえも「なかったこと」にできる（因果律に干渉するスキルの為、自身の死に対しては自動で能力が発動し、死にたくても死ねない状態）。
神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【千本桜】

能力解放と共に刀身部分が目に見えないほどの無数の刃に枝分かれし、対象を斬り刻む。この刀身に光が当たることによって桜の花弁を思わせるように見える。だが一方で、解放中は刀身が消えてしまうため、斬魄刀を通常の「刀」として使う事が出来なくなり、防御が手薄になるなどリスクも生じる。そのため力のある相手と接近戦を行う場合などには、あえて解放を行わず「刀」のまま剣技で戦うことも多い。

解号は「散れ『千本桜』（ちれ『〜』）」。卍解時にも唱えることがある。
神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【邪眼】

相手に1分間の幻影を見せる。複数人、動物にかける事も可能。2時間以内に3回まで、同じ人間に1度しか通用しないという制限が有り（瞬きをしなければ同時に複数人にかける事も可）、この禁を破ると世界から消滅し他者の記憶からも完全に消滅する。
神様から最初に貰った三つのうちの一つ。

【はねる】

はねるだけで何も起こらない。ポケモンシリーズ最弱の技。
アローン一味の幹部の八手を倒したことで神様から貰った四つ目の力。

【どんな物・場所でもあらゆるアングルから資料なしで描けるスキル】

漫画『バクマン。』に登場する中井巧朗なかいたくろうの漫画を描くためのスキル。
アローン一味の幹部のクロオビを倒したことで神様から貰った五つ目の力。

【ハーレム体質】

漫画『TO LOVEる』に登場する結城ゆづき 梨斗が持つ魅力がスキルとなってシンに与えられた。
アローン一味の幹部のチュウを倒したことで神様から貰った六つ目の力。

【天性の歌声】

漫画『BECK』に登場する田中幸雄たなかゆきおの世界の著名なミュージシャンも一聴でうならせる才能をスキル化して神様から与えられた。
アローンを倒したことで神様から貰った七つ目の力。

海軍大佐スモーカー（後書き）

今回は本編が短くなってしまってますみません。泣

あ、いろんな感想をいただきました！！

ありがとうございます

意外にも『はねる』についていろんな方から指摘を受けまして・・・。

ちょっとネタバレになってしまいかもですが、一つだけみなさんに言っておきます！

え〜神様から貰った力はたとえどんな力でも必ず一回は活躍します。とだけ言っておきましょう・・・。

なので今回、2回目のシンのプロフィールを載せました！

また力が増えた時に新しいプロフィールを載せたいと思います！！

狙われた道化師！夢を語る嵐の船出

「悪いな、俺のズボンがアイス食っちゃった。今度は5段を買っといい」

スモーカーはそう言って女の子にお金を渡した。

ん？

俺・・・か？

スモーカーがお金を渡して立ち去るのかと思いきや、こちらを見て少し驚いた表情をしている。

ああ、そういえば俺は賞金首だったんだっけ？

俺はそんなことを考えながら逃げる準備をする。

「スモーカー大佐、あいつが先ほど言いました麦わらの一味の一人ですよ！」

スモーカーの後ろにいた海兵が言う。

「麦わらの一味だと!？」

それを聞いたスモーカーは驚きの声を上げる。

「はい、懸賞金2700万ベリー!道化師のクロセ・シンイチです」

後ろの海兵がなんか言ってるようだが、今はそんなことどうでもいい。

俺は焦っていた。

今の俺ではスモーカーに勝てないことぐらいはわかっている。

覇気が使えない俺では、例え千本桜を使いこなしていても自然系ロキアには攻撃を与えられない。

だから逃げるしか選択肢はないんだが……………。

チツ……………。

なかなかスモーカーと目が合わない。

普通に逃げてもすぐに捕まってしまう。だから俺はアイツに邪眼を使うしか逃げる方法がないのに……。

シンがそんなことを考えていると、スモーカーはシンに近付いてきた。

「結局同じか……」

「!？」

スモーカーは小さい声でそんなことを言った。

結局同じ?どついうことだ??

ドゥー!!

俺が疑問に思ったとほぼ同時にスモーカーに攻撃された。

クソッ！ホワイトブローか……。

俺は壁に叩きつけられたが、すぐに大嘘憑オールフイクションきでダメージをなかったことにした。

散々練習してきたんだ。

百発百中だぜ！！

スッ……。

俺は千本桜を難なく抜ききった。

ダメージが与えられないのは知ってるが、目くらまし程度にはなるだろうよ！

「散れ！千本桜！！」

解号とともに消える刀身。

その直後にスモーカーを切り刻んだ。

が、やはりダメージは与えられない。スモーカーは煙となる。

その瞬間に俺は逃げようと走り出そうとしたが目の前にはすでにスモーカーの姿があった。

「めんどくさい奴だ」

とつと諦めやがれ！

俺はこの間にも表情を変えない。

あくまでもクールキャラでいたいんでな。

しかし本当にめんどくさい。

たとえ卍解しても今の状況は変わらないだろう。

俺はチラッと空を見た。

大分曇ってきたな・・・。

そろそろルフィはバギーに拘束されるだろう。

そう思った俺はスモーカーに「もう終わりにしようか」と言った。

「スモーカー大佐！」

その時、どこからか走ってきた別の海兵が「広場に麦わらのルフィが！」とスモーカーに報告に来た。

「放っておけ！」

「ですが……」

「俺に指図すんなって言ってるんだ」

クソッ！

あくまで狙いは俺か……。

でも……。

俺はその海兵の報告を聞いてメリー号のある船着場に向かって走り出した。

「逃がさねえ……」

カーーーー。

スモーカーの行く手を阻むかのように現れるカラスの大群。

「なんだこいつら！」

さすがのスモーカーも一瞬の隙が出来て、俺は逃げることに成功した。

カラスが空にいてくれて助かった……。

これで一分間はスモーカーを敵だと認識してくれるはずだ。

俺は急いでメリー号まで走る。

ドドオオオオオン！！

そんな轟音が鳴り響いたと思ったら、ポツポツと雨が降ってきた。

はぁ．．．はぁ．．．。

メリー号にたどり着いた時には、もうウソップとナミが船に乗っていた。

地面にはモージが倒れている。

リッチーは．．．．．まだ卵を食べていることからそんなに2人が到着してから時間が経っていないのだろう。

とりあえず俺もメリーに乗り込み、3人を待つことにした。

それから数十分、やっとルフィたちが帰ってきたので急いで船を出港させる。

それにしても凄い荒れようだな。

俺はナミの指示で、慣れない船の操作をする。

ルフィたちは帆に気を配ったりといろんなことをしていた。

「うっひゃー船がひっくり返りそうだ！」

なかなか大変な状況なのだが、ルフィの声を聞くとなんだか安心する。

やっぱり船長なんだな。

俺がそんなことを思っていると、ナミが何かに気付いたようだ。

「あの光を見て！」

ナミの言葉に、全員が同じ方角を見る。

「島の灯台か？」

マストに掴っていたウソップがナミにそう尋ねる。

「導きの灯。あの光の先にグランドライン偉大なる航路の入口がある」

「あの先にグランドライン偉大なる航路が・・・」

ナミの言葉に、ルフィが眩く。

「どっしするっ。」

そりゃ〜もちろん。

「行くよな？ルフィ」

ナミと俺でルフィに尋ねる。

ウソップはビビッていたみたいだが、ゾロとサンジも行く気満々みたいだ。

和むぜ、ウソップ。

みんなの意思が固まったところで、サンジが樽を運んできた。どうやら進水式をやるらしい。

あ、忘れてた！

夢……………。

俺の夢……………。

シンが悩んでいるうちにみんなは樽に足を乗せて夢を語り出す。

「俺はオールブルーを見つけるために」

「俺は海賊王！！！」

「俺ア大剣豪に」

「私は世界地図を描くため！！」

「俺は……世界を見るため！！」

とりあえずウソップよりは早くと思ってこう言った。

悪くないだろ？

みんなは一瞬固まって俺を見たが、すぐに笑みをこぼした。

「お……お……俺は勇敢なる海の戦士になるためだ！！」
「！」

そしてすぐにウソップも自分の夢を語る。

少しの静寂が辺りを包み、風と波の音だけになるが、

「いくぞ！グラントライン偉大なる航路！！」

「「「「「おぉー！！」」」」」

狙われた道化師！夢を語る嵐の船出（後書き）

ローグタウンで見たかったなあ〜・・・。

ルフィの「俺は海賊王になる男だー！！！」
そして早くも偉大なる航路ですよー
グランドライン

次回は会えるでしょうか・・・ラブーンに！笑

運命の分かれ道？赤い大陸を乗り越えろ！！

進水式も終わり、俺たちは嵐が続くなか偉大なる航路グランドラインを目指していた。

現在はナミがしっかりと進路の確認を欠かさずにくれていて、俺たちは休憩を取りながら今後のことを話そうとしていた。

「そういえばシンは世界を見たいって言ってたけど・・・」

そう言ったのはウソツプだった。

「ああ、偉大なる航路グランドラインにあるいろんな島や人、生き物や現象を見てみたい。もちろん・・・みんなの夢の果てもな」

俺は素直にそう答えた。

それを聞いたルフィが「シツシツシ」と笑い出す。

「シンは、やっぱり副船長に決定だな！」

ルフィが唐突にそんなことを言い出した。

周りのみんなも驚いた表情をしている。

「おれ、初めてシンに会った時から決めてたんだ!!」

「え……いいのか？」

俺は確認するように言葉を発した。

「船長命令だからな」

「その代わりしつかり頼むぜ？副船長」

「嫌ならいつでも代わってやるからな！」

「もちろん私は構わないわ！」

ゾロ、サンジ、ウソップ、ナミも了承してくれた。

俺が麦わらの一味の副船長か。

こりゃ〜本当にしつかりしないとな。

シンの副船長昇格の話が終わったところで、ナミはテーブルに海図を広げると口を開いた。

「一つ分かった事があるの。いい？ “グランドライン偉大なる航路”の入口は山よ」

「「「「山!?!?!?!」」」」」

いきなりの突拍子もない言葉にみんなは首を傾げる。

しかし、どうやらナミは本気のように海図を指指して説明を始めた。俺はもちろん知っていたが、驚いたふりをしてみんなに合わせる。

「導きの灯が差してたのは間違いなく此処……レットライン赤い土の大陸にあるリヴァース・マウンテン」

「何だ、山へぶつかれたのか?」

「違うわよ。ここに運河があるでしょ」

ゾロが疑問をぶつけると、ナミはすぐにそれを否定した。

ゾロとウソップはまだ、ナミの言う事を信じていないが、ルフィはなんだか楽しそうだ。

「そもそも、何で態々“入口”へ向かう必要があるんだ。南へ下れば、どこからでも入れるんじゃないかねエのか？」

「それは違うぞお前っ!!」

「そう、ちゃんと訳があんのよ」

「入口から入った方が気持ちいいだろうが!!!!」

「違っっ!!!!」

そんな原作と同じ会話を俺は特に参加もせずには聞いている。

この感じ……やっぱり和むわあ。

俺がそんなことを思っていると、急に外が静かになった。

「しまった……“カームベルト 嵐の帯”に入っちゃった……」

外を見たナミが半泣き状態で言う。

そうか……カームベルト 嵐の帯のことをすっかり忘れたよ。

「ちょっとあんた達、早く帆を畳んで船を漕いで！嵐の軌道に戻るのよ！！！」

ナミが怒るように指示している。

サンジだけは笑顔で頷いたけど、他の面々はイマイチ事情が分かっていない様子だ。

帆船なのにどうして漕ぐのか、何故態々嵐の中に戻るのかと、しきりに首を傾げている。

すると、不意に地震かと思えるような大きな揺れがメリー号を襲った。

全員が外に出ると、メリー号は海王類の額に乗っていて、下を覗き込めば多くの海王類に囲まれていた。

「い．．．いいな、兎に角．．．！！こいつが海へ帰っていく瞬間に思いっきり漕ぐんだ！！！」

俺たちは大きなオールを担ぎ、ジッとその時を待つ。

が、そう簡単に終わらせてくれないらしい。海王類は急に顔を傾け、大きくしゃみをしたからだ。

当然、海王類の上にいたメリー号は凄い勢いで飛ばされる事となった。嵐の方に向けて飛ばされた事だけが、唯一の救いだ。

途中、ウソップが巨大な蛙に食べられそうになったりしながら、何とか嵐の中に戻ってきた。

俺はその時の疲れを大嘘憑オールフイクションきで無かったことにしたため元気だが、ほかのみんなはひどく疲れている。

「あ、分かったわ……やっぱり山を登るのよ」

そんな中で不意にナミは言い、海流の影響だと説明した。

四つの海の大きな海流が全てあの山に向かっているとしたら、四つの海流は運河を駆け上って頂上でぶつかり、偉大なる航路グランドラインへと流れ出る。

この船はもう海流に乗っているから、あとは舵次第という訳だ。

「リヴァース・マウンテンは“冬島”だから、ぶつかった海流は表

層から深層へ潜る。誤って運河に入り損なえば船は大破・・・海の藻屑つてわけ。分かる？」

まだ疲れが残っているみんなに対してナミは言う。

俺は海の仕組みとかは良く分からないが、海流に乗った勢いそのままリヴァース・マウンテンに衝突しかねないという事だろう。

ルフィは“不思議山”の一言で片付けていたけれど、そう考えるとかなり重要な話だ。

一歩間違えれば、夢を叶える事もなく命を落す事になるのだから。

それから間もなく赤い大陸^{レッドライン}が姿を見せた。

視界の先には、海が山を登る後継が広がり、一同はその凄まじさに目を瞠る。

ここが運河の入口か・・・少しでも位置がずれれば、船ごと海の藻屑となる恐怖の場所。

ウソップとサンジが二人がかりで舵をきり、向きを定めていく。

が、そこでまたハプニングが発生した。力を入れすぎたのが原因か、命綱である舵が折れたのだ。

ルフィがその能力を駆使して無理やりに船を方向転換してくれたの

で、何とか無事山を登り始めたが、もうこのまま死ぬのではないかと本気で思ったのは言うまでもない。

そして、メリー号が運河を登りきって下り始めた。

「おお見えたぞ　グランドライン　偉大なる航路”　！！！！！！”

ルフィが大きな声で言う。

さあ、ここからが俺の冒険の始まりだ。

俺は期待を胸に膨らませ、船の前方をみんなと一緒に見る。

しかしここから、原作とは少し違うONE PIECEをシンは見ることになるのだった。

運命の分かれ道？赤い大陸を乗り越えろ！！（後書き）

さてさて、ここからがこの小説の本番！笑

今まで以上に気合を入れて書いていきたいと思えます！！

見られない決闘？ラブーン出港への咆哮

ブオオオオオオオ・・・！！！！

グランドライン
偉大なる航路に入った俺たち麦わらの一味は双子岬に向けて船を走らせていた。

風の音に紛れてラブーンの声が聞こえる。

ほかのみんなはこの声を気にしているが、俺はおもしろそうなのでそのまま黙っていた。

と、メインマストに登っていたウソップとサンジが、行く手を遮る山を発見した。

この先の“双子岬”を越えたら海しかない筈なのにとナミが言う。

「もしかして……その“山”が鳴き声の主？」

続けてナミが気がついたように言った。

数秒後……残念ながら、予想が当たっている事が判明した。
大きな鳴き声をあげ、山のように行く手を遮っていたのは信じられないほどの大きいクジラだったのだ。

「ちょっと待て、ここまで近付くと、ただの壁だ!!! まず目はどうだよ!!!」

「体の両側……じゃない? ってことは、向こうは私たちに気付いてないのかな?」

「気付いて邪魔しに来た訳じゃなくて、偶然出てきた所だった、って事?」

本当の所など分からないけれど、襲ってくる様子もないので、多分気付いていないのだろう。

これだけ大きな体をしていると、その目で見える範囲も限られているのかも知れない。

どちらにせよ、このままだと衝突して船が大破しそうなので、危機的状況に変わりはないのだが。

「おい、良く見りゃ左が少し空いてる！とり舵だ！！」

「舵折れてるよ！！！！」

「何とかしろよ、俺も手伝う！！！！」

折れた舵で何処まで出来るか分からないが、何もしないまま終わるよりマシだ。

ゾロ・サンジ・ウソップの三人がかりで精一杯舵をきり、何とか船体を曲げようとするがどんなに強く引いても上手くはいかず、クジラはもう目の前まで迫っている。

が、不意にクジラ目掛けて大砲が放たれ、船は緩やかに動きを止めた。

それでも、クジラにぶつかってしまったので、ルフィの特等席であるメリーの船首が折れてしまったし、態々相手に自分たちの存在を気付かせる事になってしまったしで、とても“良い”とは言えないが。

まあ、俺の大嘘憑オールフイクションきで治してあげてもいいけど・・・。

フランキーやサニーのことを考えるとやらないほうが良いのだろう。

それに、メリーとの冒険もなかったことになってしまっただけじゃないかと俺は考えた。

まだ俺はメリーとの冒険は少ないが、なんとなく嫌だった。

俺がそんなことを考えている間に、一同はゴクリと息を呑み、ラプーンの出方を伺っているようだ。

「……………に、逃げる今の内だア！！！」

砲撃に気付いていないのか、または単にトロイのか、ラブーンは全く動かない。

という訳で、先ほど舵をきっていた三人で、オールを使い、ラブーンの左側を通り抜ける。

気付いているのか否か、劈くような鳴き声がある場所に響き渡った。それでも襲われている訳ではないので、セーフだろうか・・・とり

あえずラブーンから離れようということ、努力する三人を他所に大砲を撃った張本人ルフィが現れて言った。

「お前一体俺の特等席に………何してくれてんだア！！！！」

何とルフィはその腕を伸ばし、近くに見えたラブーンの眼球を殴りつけたのだ。

ぶつかったのは此方なのだから、ラブーンが意図して特等席を壊した訳ではない上に、今まで“これでも”無事で済んでいた中での暴拳に、全員が声を揃える。

「アホ　　っ！！！！」

ついにラブーンの視線がメリー号を向いた……今、気付いたのだろうか。

対しかかって来いと構えるルフィの後頭部を、ゾロとウソップが二人で蹴り飛ばす。

次の瞬間、ラブーンは大きな口を開いて海水ごとメリー号を飲み込み始めた。

当然、逆らう術もなく、クジラの中へと吸い込まれていく。

そんな中で、ルフィだけが船からはじき出されてしまったが、持ち前の能力で何とかなる……だろうか。

「「「「「うわあああああ」「」「」「」

残念ながら、人の事を心配しているだけの余裕は、無かった。知っていた展開とはいえ、やはり何かに食べられるというのは嫌なものだ。

ガンッ！！

ん？

「あ、気がついた？」

ナミ・・・？

俺どうしたんだっけ？

俺は体を起こして周りを見してみる。
ラブーンにはもうルフィが描いた約束の証がある。

「アンタ、ずっと気絶してたのよ？」

まだ理解していない俺にナミが優しく言うてくれた。

うわ……………かつこわりい〜。

べつやらもう双子岬を出港するようで、ビビたちも船に乗っていた。

そのビビは何故か俺の顔をまじまじと見ている。

「アナタ……………どこかで私と会ったかしら？」

今はミス・ウエンスデーと名乗っているはずだが、この言い方は完璧にビビだ。

とりあえず俺は、まだこの世界で会ったことは無いので「いや、初めて会うけど」と言った。

ビビは「……………そう……………」と言って甲板の方に向かう。

そんなこともありながらも、ゴーイングメリー号は双子岬を出港する。

ラブーンは大きな声で俺たちを見送ってくれた。

必ずブルックを連れて来るからな。

クロツカスさんとは話せなかったが、ウイスキーピークに向けて船を進める。

見られない決闘？ラブーン出港への咆哮（後書き）

次はウイスキーピークですね！！

ルフィVSゾロは実現するのでしょうか？

そして今回空気だったシンはどんな行動をするのか。

お楽しみに！

賞金稼ぎの巢？月夜に舞う千本桜

俺たちは今、^{グランドライン}偉大なる航路の一本目の航海を終えてウイスキーピークに上陸した。

島に着く前にビビ．．．もといミス・ウエンスデーとMr・9は船を飛び出していったが．．．。

まあ、この島のどこかにいるんだろうけど．．．。

島に上陸してすぐに宴会が始まった。

ちなみに俺も参加はしたが、あまり酒は飲まずに酔いつぶれたふりをして倒れる。

宴会好きなルフィに怒られたくはないからな。

俺はあまり口を挟むのを好まない。

忠実な原作を生で見れるのだから当然だろう。

アーロンを一人で倒したのはノジコに恩返しがしたかったからだ。もちろん、ルフィに会うために海に出たかったから．．．というのも理由の一つではあるが．．．。

俺もずいぶんとONE PIECEの世界に慣れてきた。

というより最初の敵がアーロンだったから、普通の人間にはあまり

恐怖を感じない。

だからこそ俺は寝たふりまでして自分の力を試したかったんだが……。

一味全員が寝て、島の人間が一時的にこの建物からいなくなった。

俺はゆっくりと目を開けて見るが、すでにゾロの姿がない。

しまった！

先を越された。

「見ろ奴らの懸賞金だ」

イガラム……もといイガラッポイが手配書を出す。

「3000万と2700万!？」

「きつと何かの間違いだ！」

「そうだ！あんな弱そうな奴らが・・・」

そんな声が聞こえてきたので、俺はこっそりと外に出る。

ん。

屋根の上上がるのはすくめんどくさい。

でも、やっぱりかっこよく登場したいじゃん？

「なあ、悪いんだがな・・・」

「！……！」

いやいやちょっとゾロ……！……！

まだ早いつて！

俺の思いも虚しく、ゾロは続けている。

「あいつらを寝かせといてやってくんねえか？ 昼間の航海でみんな疲れてんだ」

カッコイイーーーーー！！

ゾロ、アンタは物凄くかつこいいよ！

でも待って……………もつちよつとだからさー！！

はあ……………はあ……………。

やっと登れた！

「剣士たるもの酒に吞まれるようなバカは、やらねえもんさ」

ゾロがかっこよくキメている。

「つまりこついうことだろ？」

俺もゾロに続いて大きめの声で言った。

「シン！？お前・・・起きてたのか？」

ゾロが驚いたように俺を見て言う。

俺はゾロのちょうど正面になる建物の屋上にいる。

賞金稼ぎ・・・バロックワークスたちを挟むような陣形だ。

「俺も気付いてたぜ？バロックワークス」

俺がそう口に出すと、賞金稼ぎたちの目の色が変わる。

「へえ〜」

ゾロは俺を関心している。

「シン．．．お前が戦うのは初めて見るなあ」

「俺もだよ．．．．．ゾロ！」

二人は遠い位置にいながらも雰囲気で声を合わせる。

「「相手になるぜ！バロックワークス！」」

ゾロはその言葉とともに姿を消す。

うわ〜ずるい．．．．．。

俺もゾロみたいにかっこよく下に降りたいけど．．．．．。
絶対俺が飛び降りたらドーーーーーン！！ってなるよ。

オイルファイクシオン
大嘘憑きで無傷だとしても、ドーーーーーン！！はなんかかっこ悪い．．．．．。

仕方なく俺はその場で千本桜を解放する。

「散れ！千本桜！！」

ギヤアアアア！！！！

千本桜の刃によって、何十人も賞金稼ぎが吹っ飛んでいく。

ゾロはゾロで何十人も吹っ飛ばしている。

（なんなんだアイツの刀？）

ゾロはシンの刀を気にしながらも戦い続けている。

げ！！

俺は恐くて………じゃないじゃない………接近戦が苦手な俺の後ろには数人の賞金稼ぎたちが！

いつの間によつてきたんだ？

俺は突然のことに焦りながらも、千本桜を戻して対処した。

ふう〜。

気がついて良かったぜ。

そんな危機も多少ありながらも俺とゾロは賞金稼ぎたちをぶっ飛ばした。

「やっと静かな良い夜になったな」

「ああ・・・」

チンツ・・・。

俺とゾロは静かになったウイスキーピークで酒を飲み交わす。

「それにしてもお前の刀はなんなんだ？」

あゝ．．．．．やっぱり聞いてきたか．．．．．。

俺は少し困ったが、ゾロということで簡単に誤魔化せた。

「なんだ、不思議な刀か！」

「ああ、俺も初めて見た時は驚いたよ」

「はっはっはっは」と二人で笑い合う。

さて．．．．．そろそろかな？

ドーーーーーン！！

静かになったウイスキーピークに響く轟音。

Mr・5とミス・バレンタインがこの島に到着したようだ。

もう一仕事するか!!

俺はあることを忘れて爆発があった場所にゾロと向かった。

賞金稼ぎの巢？月夜に舞う千本桜（後書き）

なんかタイトル負けしているような内容になってしまった。泣

それでもおもしろいと思って見てくれる方々・・・ありがとうございます！！
ごぞいます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0864z/>

ONE PIECE 最強の転生者

2011年12月11日10時49分発行